

「シェイクスピアとその世界」末松美知子先生解説

A シェイクスピアとその時代を知る

シェイクスピアの生涯：

ウィリアム・シェイクスピアが誕生したのは1564年、日本で言えば戦国時代末期です。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と同時代人と言えはわかりやすいでしょうか。今年はシェイクスピア生誕450周年にあたっています。

シェイクスピアの父ジョン・シェイクスピアは、手袋製造業や羊毛業で財を成した裕福な町人でした。母メアリー・アーデンは豊かな農家の出で、かなりの広さを持つその実家は今でも残っています。シェイクスピアの生家も、ストラットフォード・アポン・エイボンの街中に現存し、いつも観光客でごったがえしています。ちなみに、この家は、この時代に一般的だったチューダー様式と呼ばれるスタイルで建てられています。

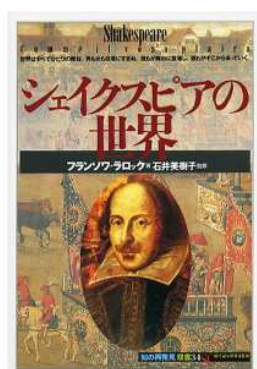
シェイクスピアは地元の公立学校で英語の読み書きに加えて、聖書とラテン語の読み書きを学びました。シェイクスピアは同時代の他の劇作家たちのように大学出ではなかったものの、ラテン語を習得するなど、当時で言えば十分な教育を受けていたと言えるでしょう。卒業後、ロンドンに出るまでは、家業に従事していたのではないかと考えられています。

1582年にシェイクスピアは18才で、8才年上のアン・ハサウェイと結婚しています。ハサウェイ家もかなり豊かな農民の家系でした。すぐに長女スザンナ、そして双子のハムネットとジュディスが誕生しています。

その後1592年頃には、ロンドンの人気劇作家として評判を得ていました。ロンドンにたどりついた明確な時期や経緯は不明ですが、単身赴任でロンドンの演劇界に身を投じたシェイクスピアは、俳優（脇役専門）、劇作家、劇場株主として成功を収め、故郷ストラットフォードに家を建てるなど経済的にも恵まれました。



新発見されたシェイクスピアの存命中に描かれたといわれる肖像画（46歳頃）



1610年、46才でシェイクスピアは演劇の世界から引退し、ストラットフォードに帰っています。市内のニュープレイスと呼ばれている家（現在は空地）で余生を送り、1616年に52才で亡くなりました。

波瀾万丈の劇を多く書いたシェイクスピアですが、ロンドンに出て役者・劇作家になった以外は、平和で、小市民的な堅実さを持っていたと言えるでしょう。彼の墓は、ストラットフォードの代表的な教会である聖トリニティ教会にあります。エイボン川の川岸にある美しい教会です。



聖トリニティ教会内部（撮影：末松先生）

シェイクスピアとロンドンの演劇：

シェイクスピアが劇作家としてどのように活躍したのかを示す記録はほとんど残っていません。明らかなのは、彼が属した劇団（宮内大臣一座、後に国王一座と改名）と同僚の名前、作品が上演された劇場（グローブ座とブラックフライアーズ座）くらいのものです。

当時の劇作家は色々な劇団に作品を売ることがほとんどでしたが、シェイクスピアは例外で、宮内大臣一座の座付き作者としてのみ劇を書きました。彼の戯曲は、一般の観客だけでなく、エリザベス女王をはじめ王族や貴族にも好まれ、一座が宮廷に招かれて作品を上演したことも知られています。

当時、ヨーロッパでも有数の都市に成長したロンドンの人口は、20万を超えていました。1570年代以降には常設劇場も8つに増え、ロンドン市民にとって演劇は最大の娯楽となったのです。

当時の劇場についての貴重な資料として、スワン座のスケッチが残っています。

劇場の建物は円形に近い多角形で、収容人数は、2000～3000人だったと推測されています。ステージや観客席の一部以外に屋根は無く、土間は立ち見でした。

俳優は全て男性で、女役は少年が演じていました（あのジュリエットも少年が演じていたわけです）。現代の上演の様に舞台上にセットはありません。そのため衣装が大変重要で、役者は貴族から払い下げられた豪華な衣装を着て観客の目を楽しませたのです。



復元されたロンドンのグローブ座

（撮影：末松先生）

B 作品を味わう

シェイクスピアの作品：

シェイクスピアの作品は、全部で 37 作品が残っていますが、それらは通例、歴史劇、喜劇、悲劇、問題劇、ロマンス劇に大別されます。シェイクスピアの劇場グローブ座のモットーは「この世は全て舞台である」です。人が生きるこの世界は舞台でありまた舞台にはこの世界全てがあるという信念のもと、シェイクスピアは、美しく力強い言語、豊かなイメージで、人間の生に関わるあらゆるテーマをその作品に描き出しました。彼の作品が 450 年たった今も世界中で読まれ演じ続けられている理由として、

- 1) 生き生きして魅力的な人物達
 - 2) 主筋と副筋が絡み合う重層的な構造と骨太の骨格
 - 3) 全てが書き込まれているわけではない解釈の余地
- などがあげられます。

解釈の多様性、普遍性こそがその最大の魅力と言って良いかもしれません。



C 翻訳と翻案の広がり

日本でも明治以降数々の翻訳によりシェイクスピア作品が紹介されてきました。日本中の劇場で毎月上演されているほか、映画、テレビドラマ、アニメへの翻案も盛んに行われ、幅広く受容され続けています。シェイクスピアは常に今を生きているのです。